

裏路地探険

神武山のふもととはかつての城下町
 明治の英才たちが暮らした
 歴史情緒あふれる家々が並ぶ

豊岡城下、歴史の跡をたどる／豊岡市京町

豊岡市京町地区の中心に位置する神武山。今はなき豊岡城があったこの山のふもととは、かつて武家屋敷が建ち並ぶ城下町だった。中世は後白河法皇の私有地で「城崎荘」といわれおり、羽柴秀吉の但馬平定後、「豊岡」と改名され、豊岡城と城下町が形成された。

神武山は、東に蛇行する円山川、西にそびえる山々を自然の城壁として利用できることから、豊岡城が築城された。町並みには今も城下町特有の姿がみられる。敵の進入を防ぐために鍵型に曲げられた道筋や南北に巡らされた内堀などである。

江戸時代に豊岡城が廃城された後、神武山のふもとには陣屋が



浜尾新が暮らしていたという五軒長屋は、現在も保存されている



豊岡小学校前の通り



熱心に説明を聞く参加者の皆さん



教育会館の隣には久保田讓邸跡の碑が建つ



東京大学医学部に眼 downstairs 教室を創設した河本重次郎(こうもとしげしろう)邸跡には、明治40年頃に造られたレンガ塀が今も残る



久保田讓邸跡(現在は教育会館)

猪子止之助邸跡

河本重次郎邸跡



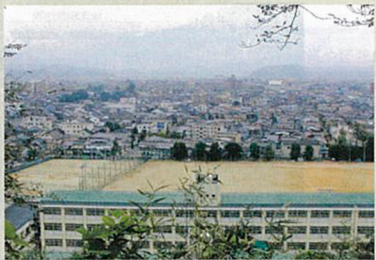
神武山に登る参加者の皆さん



神武山頂上。春は満開の桜が咲き、花見客や行楽客で賑わう。



頂上にある本丸跡からは豊岡の市街地が一望できる



本丸跡から見た豊岡の町並み(南方向)



明治4年、豊岡県設置の際、久美浜から庁舎とともに移築された図書館前の旧豊岡県庁門



図書館正面の道路脇には、石東氏りく生地跡の碑が建てられている



石東氏りく生地跡の碑



町並みにとけ込む玄武岩



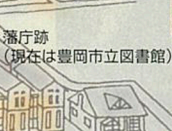
公園の大きな木々は、城下町の歴史を見守ってきたのだろう



めくみ公園前の藩庁時代の門。当時のものはここしか残っていない。



豊岡藩藩主・京極家の屋敷跡



藩庁跡(現在は豊岡市立図書館)



浜尾新が住んでいた五軒長屋

豊岡小学校

めくみ公園

和垣謙三邸跡

久保田讓邸跡



図書館駐車場の脇道から神武山へ。入り口には大きなクルミの木が茂っている。

置かれ、明治維新に至るまで京極家による統治が続いた。陣屋跡には現在市立図書館が建っているが、その建設に伴っての発掘調査では、織豊期・江戸時代の建物跡など多くの遺物が見つかった。藩邸があった図書館一帯は武家屋敷が取り囲み、高級家臣ほど藩邸の近くに住んでいたという。赤穂浪士の討ち入りで有名な大石内蔵助の妻りくは、この辺りに屋敷をかまえていた京極家の筆頭家老、石東家で生まれた。離縁後は子どもを連れてこの地に身を寄せていたようだ。

幕末から明治時代にかけて、この武家屋敷に住んでいた豊岡藩の家臣からは数多くの偉人が生み出されている。その顔ぶれは、京都大学名誉教授の猪子止之助、東京大学教授の和垣謙三、文部大臣の久保田讓、豊岡市水道建設費を全額寄付した鉱山王の江種造など、実に多士済々であった。図書館の西隣に今も残っている五軒長屋には、後に東京大学総長となる浜尾新が住んでいた。この長屋は、浜尾家が江戸から豊岡に引き上げることになった時、藩が大急ぎで武器庫を改造し、用意した住まい。幼くして父を失った浜尾は、長屋で内職をしながら勉学に励んだという。夜は天井から紐を下げ、それを首にぶらさげて睡眠と戦いつつ読書したという逸話も残されている。

藩邸内の東側には藩校の「稽古堂」があり、士族の子弟は7歳になると入学が強制された。講師をしていたのは、幕末期に当代一の儒学者といわれた池田草庵。藩主の懇請を受け、出張講義をしていたのだ。

また、豊岡藩では人材育成のために藩費遊学(奨学金)制度があり、浜尾新を含め、この制度に支えられて後年大きく羽ばたいた人は数多い。勉学熱心な子弟たちの礎は藩のこうした体制からも育っていたのだろう。

講師：山口久喜さん

裏路地探険隊員募集

平成17年1月22日(土)
 「栗鹿神社周辺を歩く」山東町栗鹿
 *実施日の10日前までに、18ページ掲載のT2編集部へ、住所・氏名・年齢・電話番号・「裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキでお申し込みください。開催は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切日後、案内を参加ご希望の方へ送付致します。